

近森病院 理学療法科

科長 田中健太郎

はじめに

2023年は、理学療法士56名の体制で運営を開始し、4月には6名の新入職員を迎えた。経過中に8名の中途退職、8名の育休復帰と5名の育休入り等があり、年末の現場のスタッフ数は58名（前年同月55名）となった。人材育成を目的にした法人内の人事異動に加え、性別を問わず産前産後、育児休業を取得する頻度が年々増加していることなどから、スタッフの入れ替わりが激しい1年であった。

また、新型コロナウイルス感染症の院内クラスターを1月と7月に経験した。陽性スタッフも数名いたが、これまでの経験と基本的な感染対策を継続し、理学療法業務を止めることなく診療を継続してきた。ポストコロナ時代におけるリハビリテーションのあり方を常に意識し、組織運営を図った1年でもあった。

業務実績

1年間の新規処方数を図1に示す。入院5441件（前年5422件）、月平均453件（前年451件）であり、前年より増加した。特に7月のクラスター終息後の8月以降は、病床稼働率の改善もあり、新規処方数も増加した。外来の新規処方数は140件（前年156件）、月平均11件（前年13件）であった。

10月には法人内の病院機能分化を進めるべく、外来運動器リハビリテーションは縮小方針となり、より早期から治療介入が望まれる入院患者へ注力する形で業務を遂行してきた。

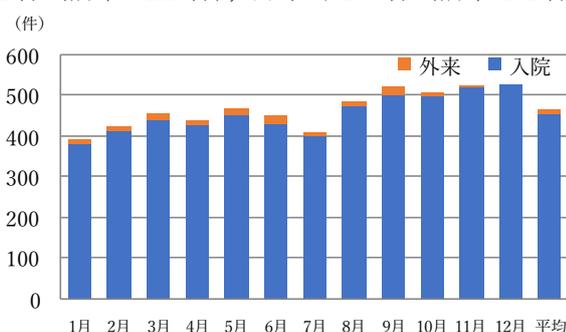


図1. 月別新規処方数

月別にみた延べ実施件数を図2に示す。月平均で入院7359件（前年7262件）、外来285件（前年302件）で入院患者への実施件数が増加した。

月別にみた疾患別リハビリテーション実施単位数を図3に示す。月平均15240単位（前年14611単位）であり、昨年より増加した。

効率的で効果的な理学療法が提供できるよう、集中病棟での新規患者のスクリーニング、介入開始時期の判断やスタッフのスケジュール調整などを弾力的に取り組み、業務改善にも努めてきた。

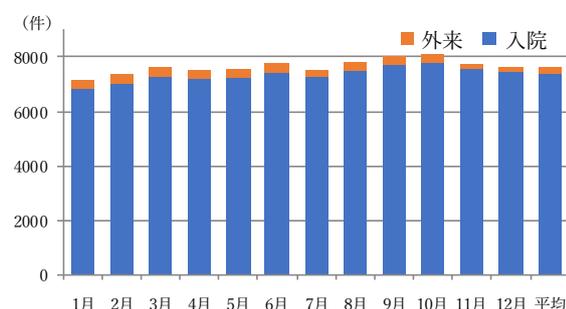


図2. 月別延べ実地件数

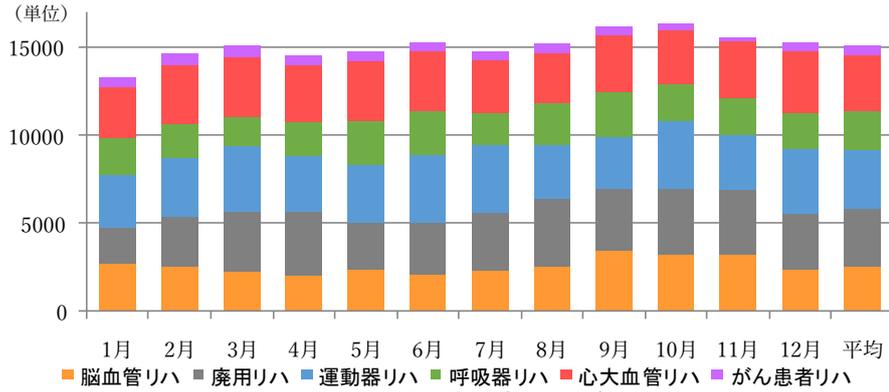


図3. 月別延べ実地単位数

おわりに

喜ばしいことに、近年は性別を問わず多くの子育て世代スタッフが、産前産後、育児休業を取得している。本年は所属スタッフの1割強になった時期もあり、現場の忙しさは相当のものだったが、皆で工夫し、助け合いながら患者診療や現場の運営を支えてきた。

ポストコロナ、働き方改革、少子高齢化など医療を取り巻く社会環境は常に変化しているが、今後も高知の地域医療を守る最後の砦の一員として貢献できるよう、理学療法の質と量を発展させていきたいと考えている。

学術発表・講演会等

学術発表

演題名	演者	学会名	開催日(県)
高齢心不全患者の退院時ADLと介護サービスの利用状況について	藤山 祐司	日本心臓リハビリテーション学会 第6回四国支部地方会	3月26日(WEB)
運動誘発性肺高血圧症例に対する外来心臓リハビリテーションでの関わり(ポスター優秀賞)	森本 和加	第29回日本心臓リハビリテーション学会学術集会	7月15日(神奈川)

講演

講演名	講師	研修会名	開催日(県)
回復期の心臓リハビリテーション	前田 秀博	令和4年度高知県理学療法士協会 中央東区域第2回ブロック研修会	1月20日(WEB)
外来心臓リハビリテーション	青木 俊憲	心臓リハビリテーション 地域連携の会	5月30日(高知)
誰でもできる運動指導	久保 遼介	第21回心不全療養セミナー	6月23日(高知)
呼吸リハビリテーションにおける基礎と解剖	前田 秀博	2023年度 高知県理学療法士協会 理学療法士講習会(基本編理論)	9月9日(高知)
呼吸リハビリテーションにおける評価	田中健太郎	2023年度 高知県理学療法士協会 理学療法士講習会(基本編理論)	9月9日(高知)
早期離床と合併症予防のための急性期理学療法	田中健太郎	認定理学療法士臨床認定カリキュラム脳卒中	10月29日(WEB)
復職支援に向けたMets応用～心臓リハの視点も含めて～	前田 秀博	令和5年度高知県産業保険研究会 第3回研修会	11月18日(高知)

論文

タイトル	執筆者	誌名
老年健康科学領域の研究で用いられる統計解析 — 検定方法の選択基準と手順について —	滝本幸治・近藤寛 田中健太郎(共同執筆)	奈良学園大学紀要第15集 2023,107-120,
COVID19院内クラスターによる影響調査 — 実践報告を踏まえて —	田中健太郎・滝本幸治・ 前田秀博	四国理学療法士会学会誌 2023:44:96-97